

23 浦河べてるの家における「防災力」強化の試み

—変わらないもの、変わったこと—

研究所障害福祉研究部 山根耕平 河村宏 八巻知香子

【浦河べてるの家の幻聴・幻視・被害妄想などの症状への取り組み】 浦河べてるの家では、幻聴や幻視、被害妄想などの精神障害で苦しむ人たちが、自分の苦しみを安心してぼろっと話し出せる場所作りを20年以上に渡ってこつこつと作り上げてきた。具体的には幻聴・幻覚・被害妄想に苦しむ人たちが“自己病名”を付けたりすることで本当の症状を安心して語れるようにして、あとは本人が自力で問題を感じられるようになるような支援のネットワークが作り上げられている。ちなみに私の自己病名は“統合失調症・安全なクルマ作りと言ったら『ぶっ殺す』と言った元上司の声がよみがえる型”だが、この自己病名で自己紹介をすると多くの方が「なるほどね・・・」と頷いてくれるため、自己紹介で病状を説明しているうちに苦しくて動けなくなることが少なくなり、自己病名を付ける以前よりも友達が増えた。

【国リハとべてるメンバーと浦河町の協力体制による共同研究】 国リハとの共同研究は、3年の間に当事者一人一人の個性や要望を拾い上げながらデータとしてまとめて、DAISYやGISなどのわかりやすいアプリケーションソフトの形で一人一人に情報を返していくという方法を用いて、浦河町に暮らす当事者自らが考えて行動できるような下地を作ってきた。また浦河町の協力を得て、自治会主催の自主防災演習も繰り返し行ってきた。

本年10月に行った東町第1自治会主催の自主防災演習ではべてるの女性メンバーが1名参加していたが、べてるのメンバーが来ていたというふうには浦河町の方たちは理解していなかった。また8月に行った北海道総合防災演習ではべてるのメンバーが2人来ていた、と自治会長さんが何度も言っていたのだが、そのうち1人は実は国リハの人だったりしたこともあり、浦河町の方はべてるの精神障害当事者に気づいていないことが多い。(私も余計なことを言わずに黙っていれば精神障害に気づかれずに無難に過ごせることに気づき、幼稚園入園以降は家の外では自分から余計なことは言わないようにして生きてきた)

このように当事者も健常者も、互いの存在にはなかなか気づかない微妙なバランスの中で、浦河町の防災情報を自らが得て考えるプロジェクトがこの3年間少しずつ進められてきた。

【国リハとの共同研究によるべてるのメンバーと浦河町の人たちの変化】 本年11月15日に千島列島で発生した地震により、北海道沿岸には20時29分に津波警報・および津波注意報が発令された。このとき海岸線沿いの浦河町東町第1自治会に住むべてるのメンバー15人が、互いに連絡を取り合って自主的に避難場所の浦河高校まで避難した。浦河町の人たちは21:40過ぎごろまでにクルマで高台に避難した方が多かったが、今後はべてるのメンバー以外の浦河町民の方々にもDAISYやGISを活用して一人一人の家の周りの防災情報をより細かく提供して、誰もが身近なところにすぐに避難できるようにしていきたい。

DAISYやGISについては、データを自分で育てて見せ合って交換できるようにカスタマイズして、互いに自慢できるような“ポケモンカード”のような機能を持たせて、現状では完全に対応できていない認知が苦手な方々にも活躍して欲しいと思っている。